京都大学 大学院教育学研究科／教育学部

48
2024.6

News Letter

Graduate School of Education

ドルトムント工科大学との研究ワークショップ

巻頭言 2
齊藤 智　研究科長

名誉教授から 3
佐藤 卓己　名誉教授

トピックス 3
駒込 武　教授

研究ノート 4
[教員から] 三澤 紘一郎　教育・人間科学講座　准教授
[院生から] 山迫 花寧　修士課程2回生
[社会人院生から] 森 一也　博士後期課程3回生
[留学生から] Qi Junshuai　修士課程2回生

活動報告 6
[附属臨床教育実践研究センターから]
松下 姫歌　附属臨床教育実践研究センター長
[教育実践コラボレーション・センターから]
西 見奈子　臨床心理学講座　准教授
[グローバル教育展開オフィスから]
南部 広孝　グローバル教育展開オフィス長

事務室から 7
小林 紗菜　教務掛員

国際交流事業 8
広瀬 悠三　教育・人間科学講座　准教授

若手研究者出版助成事業 8

諸記録 10
・教員寄贈図書リスト　2023（令和5）年度
・主な出来事（2023.11.1 ～ 2024.3.31）
・入試結果　2024（令和6）年度
・学位授与件数　2023（令和5）年度
・教育職員免許状取得状況　2023（令和5）年度
・外部資金受入れ（2023.10.1 ～ 2024.3.31）
・科学研究費補助金　2024（令和6）年度
・人事異動（2023.11.1 ～ 2024.4.30）

諸報 15
・新任教員・事務職員紹介

教育学研究科・教育学部基金 16

京都大学 大学院教育学研究科ロゴマーク

このロゴマークは、京都大学学術情報メディアセンターの元客員教授・奥村昭夫先生のデザインです。奥村先生は、ロート製薬、グリコ、牛乳石鹸などのロゴマークやパッケージなどを手がけた著名グラフィックデザイナーです。本研究科・学部の「育ち」「つながり」「先端」といったキーコンセプトをもとに、教育学部本館の正面玄関を見守るクスノキの葉をモチーフとし、緑のグラデーションで成長の変化、中央の空間でこれから生まれてくるものを表わし、全体として両手で優しく包み込むイメージのデザインとなっています。

巻頭言

過去と未来のはざまで

教育学研究科長・学部長　齊藤　智

今年は桜の開花が昨年よりも少し遅く、入学式には浅紅色のキャンパスが新入生を祝福してくれることとなりました。私の研究室からは、東側に桜を眺めることができ、新年度の慌ただしさの中でも刹那の春を感じることができます。西には尊攘堂を擁するこの風景が、今春にはなぜか教育学部・教育学研究科の辿ってきた道のりに思いを馳せさせることとなりました。

国の登録有形文化財に指定されている尊攘堂に、かつて教育学部の本部が設置されていたことをご存知でしょうか。2019年に発行された「資料に見る京都大学教育学部の70年（以下、70年史）」によれば、それは、1955年4月からの短い期間で、翌年5月には、学部本部は、研究室や講義室と一緒に、新築された熊野校舎へ移転しています。この移転により学部の多くの機能が統合されて、初めて、教育学部は1つの屋根の下にまとまりました。

1965年4月に再度、学部本部は尊攘堂に入り、同年に竣工した教育学部本館へ1966年3月に移転しました（70年史を参照）。それ以降、学部本部が移転したことは一度だけです。耐震改修工事のために教育学部本館から一時的に退去しなければならなかった2009年9月から2010年3月までの半年間でした。私自身も直接経験したこの移転の期間、教育学部・教育学研究科の機能は学内の様々な場所に点在し、教授会も他部局の会議室を借りて行われていました。事務機能も分割され、会計や総務の機能は、尊攘堂の目の前に建てられたプレハブの２階に入っていたことを思い出します。教員室も複数箇所に分散し、私は、近衛通りの南に位置する、旧洛東病院近衛寮（以下、近衛寮）に入りました。教室や事務室、会議室と距離があり、移動に市バスを使用するような状態で、不便なことが多かったことは間違いありませんが、その居室を確保するために尽力された当時の矢野智司研究科長のご心労を拝察し、何ら不満を感じませんでした。

近衛寮で割り当てられた研究室は、四畳半の畳敷きの部屋で、書籍も什器も、半分も持ち込むことはできず、残りの書籍や資料、本棚などは、本部構内の総合研究15号館（旧建築学教室本館）の２階の一室に半年間保管されました。移転中、そうした書籍や資料が必要となることはありませんでしたから、（私の）研究室は四畳半で十分なのかもしれません。学生が指導を受けるためにわざわざ近衛寮までやってきたこと、修士論文や博士論文のための心理学の実験が、様々な装置を持ち込んだ四畳半の部屋で行われていたことも記憶に残っています。その他、近衛寮が女子寮であったことから、設備として男性用のお手洗いが存在せず、男性教員にとってはやや特殊な状況にあったということも、今となってはちょっとした小噺のネタでしょう。

移転に伴う記憶を巡って長々と書いてきましたが、建物や居室にかかる変化はこの間の出来事の一面でしかありません。近衛寮で教育研究活動を行なっていた時期は、教育学研究科がグローバルCOEプログラム「心が活きる教育のための国際的拠点」を牽引していた期間と重なります。この拠点プログラムは、教育学と心理学という２つの立場から「心が活きる教育」についての教育研究を進めるものでした。教育学研究科は、グローバルCOEプログラムにおいても、その前身である21世紀COEプログラムにおいても、強いチームワークと潤沢な予算によって、多くの優秀な研究者を世に送り出すことに成功しています。そのようなプログラムに関わりながら近衛寮で過ごした時期に思い描いていた教育学研究科・教育学部の将来の姿は、耐震改修工事を終えて刷新された真新しい建物のように瑞々しく、教育の力を様々なフィールドで体現する活気に満ちた組織でした。

教育学研究科は、その後も、リーディング大学院プログラムなどのプログラムに参画し、若い力によって成長し続けています。10年以上の時を経て、現時点から展望する教育学研究科・教育学部の未来像も、近衛寮で思い描いた姿から大きく変わりました。どのような未来を思い描くのかは、どのような今を生きているのか、どのような過去経験があるのかによって左右されますから、このことは当然のことかもしれません。それ故に、過去のある時点に立ち、教育学研究科・教育学部の未来の姿を描いてみることも面白いのではないかと思料するところでもあります。尊攘堂に学部本部が置かれていた時代の先達が、教育学研究科・教育学部にどのような未来を託していたのか、想像するところから始めてみようと思います。

思い残すことのない20年間

佐藤 卓己

本年三月で二〇年間の京都大学における教員生活を無事に終えました。京都大学に教員として戻った二〇〇四年四月に私が想定していた教育研究のミッションはすべて完了しました。その意味で、京都大学での生活に思い残すことは何一つなく、本当に幸せな二〇年間でした。それを支えていただいた教職員の皆様に、まず心よりの感謝を捧げたいと思います。

日文研からの異動時に「なぜ京大に行くのか」と問われ、「メディア史の博士を十人出したい」と答えました。結局、十二名の博士を送り出すことができ、全員がしかるべき大学のポストを得ることができました。これにまさる喜びはありません。むろん優秀な学生のみを相手にした結果ですから、教育者として誇れるものでもありません。むしろ、修士課程の二年間で個別テーマの「専門家」となり、博士課程の三年間でそのテーマの「第一人者」となる急速な成長プロセスと伴走した生活に私自身が励まされたと思います。そうした研究と教育が一体化したフンボルト理念の空間を教育学研究科は与えてくれました。

私がそこでしたことは、先行者として難所がどこにあるかを予測し、せいぜい近道を示唆して、あとは見守るぐらいでした。しかし、難所を避けて最短コースを進むことが、創造的な研究にとって最終的に良かったのかどうかは結果次第というべきでしょう。それをこれからゆっくり観察させてもらうことにします。

早期退職した理由については、何度か尋ねられたことがあります。短期的に考えれば、残り二年間も京都大学にいる方が居心地よいはずです。ただ、それではどうしても「守り」に入ってしまい、新しく何かにチャレンジする気になれないと感じました。まだ余力のあるいま、新天地に移って「攻め」に転じてみたいというのが正直な気持ちでした。東京での新生活に年柄にもなくワクワクしています。

最後になりますが、教育学部・教育学研究科の発展を祈念しております。

最終ゼミ

トピックス

はじめてのクラウドファンディング

教育・人間科学講座　教授
駒込 武

ウクライナ戦争を契機として「台湾問題」が関心を集めることになったために、講演会などの講師に招かれる機会が増えた。自分なりに工夫して話してはみるものの、やはり自分の話だけでは伝えきれないものがある。一回限りの講演会の限界も感じた。

すべての学生・市民に開かれた、継続的な学びの場をつくりたい。昨年度、そうした思いから友人や学生の力も借りて自主講座「認識台湾」を立ち上げ、台湾から呉叡人教授（中央研究院台湾史研究所副研究員）をお招きしたり、台湾現代史を描いた映画『返校』を上演したりした。資金という点では、幸いにして京都大学「分野横断プラットフォーム構築事業」の支援を受けることができた。だが、今年度も継続するためにはクラウドファンディングが必要とのこと。大学の図書購入費やトイレ改修費までクラファンで集める昨今の風潮に疑問を抱いていたので、ためらいもあった。だが、研究成果を広く市民と共有していくための資金を市民社会から集めるのはおかしくないはずだと考えて挑戦してみることにした。

いざ始めるとなると、まずリターンを考えるのが大変だった。当初は「台湾関係ブックガイド」のようなものをつくろうと考えていたのだが、ブックガイドは自主講座への参加者すべてに無料で配りたい。ならば…ということで、台湾の歴史散策マップとポストカードを手作りでつくることにした。いよいよ呼びかけ開始、まず友人・知人にお知らせしたが、サポートいただくのはありがたいやら、心苦しいやら…。それにしても、思ったようには集まらない…。だが、『京都新聞』や『朝日新聞』でとりあげてもらったことでようやく軌道に乗り始め、目標の100万円を達成することができた。その過程で自主講座に期待を寄せるサポーターのメッセージに接して、大いに勇気づけられた。たくさんの方々の思いが詰まったこのお金、今後の企画のなかで大切に使っていきたいと考えている。

教員から

勝負師・研究者・芸術家

教育・人間科学講座
准教授
三澤 紘一郎

将棋のプロ棋士の理想の姿として、谷川浩司十七世名人は次の三つの顔を持つこと、そしてそれらを状況に応じて切り替えられることを挙げている――勝負師、研究者、芸術家。

将棋には勝ち負けがある以上、勝ちにこだわる勝負師でなければ昇段もタイトル獲得も叶わない。しかし、目前の対局の勝利ばかりを目指しているとやがて行き詰まるため、研究が必要となる。定跡の整理や体系化、新手や独創的な戦型の案出といった、将棋の真理を追究する研究者の側面である。ところが、これらだけではまだ足りない。同名人によれば、上へ行けば行くほど、芸術家としての資質も要求されるという。芸術家としての資質とは、自分と対局者を超えた第三者に、そして後世に、美しい棋譜を残す、あるいは負けに近づくことになってもこのような手は決して指さないというような美的感性を指すようだ。

学術研究にもほとんど同じことが言えるのではないか。「研究職」に就いているのだから研究者であることは当たり前……とは限らない。自分の過去10年を振り返ってみると、「勝負師」としての面が強すぎたように感じられる。将棋の対局には持ち時間があり、いつまでも考え続けているわけにはいかない。どこまでも深く掘り下げる真理の探究から、当該対局での勝利を目指した形勢判断へと移らなければならない。同様に、締切と字数が設定された環境の中で「採択」を目指し論文を作成するという作業は、「研究」よりも「勝負」の面が色濃い。しかもそこでの実際の相手は、学術コミュニティや未来世代であることよりも、ごく数人の査読者であることも多い（学術研究における勝敗の基準は将棋のそれよりあいまいで、いわば「採点競技」に近い）。

勝負師かつ研究者かつ芸術家――道のりは果てしなく遠い。しかし幸いなことに、私が末席を汚している哲学・教育人間学的な探究は、その学問自体が「美的感性」との親和性が高いように感じている。

院生から

「学びたいのに学べない」人をなくすために

教育社会学講座
修士課程2回生
山迫 花寧

昨年5月「いいあす京都」という自主夜間学校が開校されました。私がスタッフとして参加するこの学校には、義務教育段階の教育を十分に受けることができなかった人たちが学びの機会を求めて参加しています。不登校の人、戦後日本の混乱期に退学せざるを得なかった人、障害を理由に学校に通えなかった人、家庭を支えるため学校に通わず働いていた人。それぞれ背景は異なりますが「学びたい」という強い思いを持って参加する点は皆共通しています。学習できる環境は私にとってこれまで当たり前で、そこに特別な意味を考えることはありませんでした。しかし、ここでは誰もが学ぶことのできる環境を心から喜んでいて、もっと学びたいと伝えています。学びを通して叶えたい夢を語り、学びに真剣に向き合う参加者の姿を目にする度、自分がどれだけ恵まれた環境で学んできたのかを省みるとともに、学びたいのに学べない人が生まれてしまう理不尽な社会を何とか変えられないものか葛藤する日々です。

私の研究対象である『外国にルーツを持つ子どもたち』もまた、「学びたいのに学べない」課題を抱えやすい状況にあります。近年外国にルーツを持つ子どもたちの数は増加を続ける一方で、日本語指導などの特別な支援を行う体制は十分には整えられていません。特に外国にルーツを持つ子どもの在籍が少ない学校・地域では人材・予算不足により支援員の派遣が難しく、教員も経験不足や多忙化の影響で十分な支援を行うことが難しい現状があります。こうした支援不足は不就学や中途退学のリスクを高め、「学びたいのに学べない」児童生徒を生む原因にもなっています。この課題をなんとか解決できないか、この思いが私の研究に向き合う一番の動機です。外国にルーツを持つ子どもたちへの支援の充実、そして課題の解決に少しでも寄与できるよう、試行錯誤しながら研究を進めています。

社会人院生から　時間をかけることの大切さ

教育学環専攻
博士後期課程3回生
森 一也

私は普段、医療機関や私設心理相談室で臨床心理士という仕事をしています。京都大学への編入を決めた頃、社会はまだコロナ禍の真っ只中にありました。当時、病院ではミッションを果たすために感染対策が施され、対面での活動は休止を余儀なくされていきました。私の専門とする心理臨床学は、直接、その方にお会いし、お話しをうかがうことを基本としています。一時的にせよ、その時間が失われたことで、専門職アイデンティティが揺るがされ、自分の中にあった問いを深く見つめ直す機会となりました。

日本では国民皆保険の制度があり、皆に平等に医療が提供されますが、その資源は限られており、どうしても時間効率を考えねばならない側面があると思います。もともと余裕を失いやすい自分にとって、コロナ禍がもたらした制約は時間のあり方を考えさせました。現代社会が強調するようにコスパ・タイパだけでいいのか、そこに心理臨床の「人と人が対面して」「時間をかけ」「深く関わる」営みが寄与できる点は何か。問いはつきませんでした。京都大学の臨床心理学講座は日本における心理臨床の礎が作られた歴史ある場所です。そのような場所に、自分も身を置いて、同じ空気を吸うなかで、心理臨床の原点に触れられるのではないかと思いました。周りの人の協力や助けを得る中で、実践指導者養成コースに進学するという幸運を得ることができたのです。

様々な領域で活躍する同僚たちとの討議は楽しく、日々、新たな発見があります。とくに、カンファレンスに出て、先生方の臨床への真摯なご姿勢や深い問いを目の当たりにすることは、臨床家としてのあり方を見つめ直す絶好の機会です。２時間という時間の中で、一人のクライエントさんについて、様々な歴史が立ち現れ、その理解の深さには驚くばかりです。また、少し疲れたときは、図書館の窓から眺める、時計台、雄大な山々が、自分にさまざまなインスピレーションを与えてくれます。

このような貴重な学びの機会を与えてくださった先生方、同僚の皆さま、そして家族に深く感謝しています。

留学生から　発達科学の視点から、ヒトの交流について考えたい

教育・人間科学講座
修士課程2回生
Qi Junshuai

私は現在、大学院の修士課程で発達科学を学んでいます。発達科学は、人生を通じての持続的な成長や、natureとnurtureのバランスと統合を重視した人間科学です。私が所属している明和研究室では、従来の研究でよく見られる、WEIRD（西洋の教育を受けた、工業社会の裕福な人々）の基準を見直し、個性や文化の多様性が創発する原理の解明を目指した科学です。私は、このような斬新な考え方に魅力を感じ、同じ東アジアの国として中国が学べることがあるのではと思い、明和研究室で研究を行うことを志しました。

しかし、大学院に研究生として入学した当初は、COVID19の影響により対面授業が実施されず、中国からオンラインでゼミに参加することしかできませんでした。心身ともにとても辛く、研究へのモチベーションを保つのが難しい時期でした。半年後、感染症対策が緩和され、念願叶って京都大学に来ることができました。リアルな時空間で研究室の仲間と交流できること、研究活動の感動を共有できることの素晴らしさを改めて実感しました。こうした自身の経験から、私は、対面およびオンラインでの交流がヒトの心身にどのような影響を与えるのかに興味を持つようになりました。

現在、情報科学技術は目覚ましい進歩を見せ、中でもSNSは人々の生活の多くを占めるようになりました。大量のテキスト情報を、時間や場所を問わず他者とやりとりする交流を日常とする世代において脳内にはどのような変化が生じているのでしょうか。ヒト（*Homo sapiens*）という生物の脳やこころは、これほど激減する環境にどのように適応していくのでしょうか。こうした解のみえない問いに思いをはせ、世界最先端の研究を先生や仲間とともに探求していきたいです。

附属臨床教育実践研究センターから

臨床教育実践研究センターの活動

附属臨床教育実践研究センター長
松下 姫歌

附属臨床教育実践研究センターは、現代の心理社会的問題に対する教育・研究および実践の推進を目的に活動しています。70年の歴史を有する心理教育相談室における活動を基盤とし、国内外の大学や専門機関と連携し、リカレント教育講座や公開講座の開講、機関誌「附属臨床教育実践研究センター紀要」の発刊等を通じて、新たな知見の発信を行っています。

今年度のリカレント教育講座は「『心の教育』を考える―現代における不登校―」と題し、8月11日に開講します。午前の部のシンポジウムには、この古くて新しいテーマに造詣の深い、大阪樟蔭女子大学の坂田浩之先生と、京都府木津川市立木津南中学校教諭の永尾彰子先生をシンポジストとしてお迎えします。坂田先生は本学の臨床心理学教室のご出身で、不登校児の通所施設に長年携わっておられ、不登校の問題の性質の変遷についてもお詳しい先生です。永尾先生は、学校教諭としてのご経験に加え、京都府総合教育センター教育相談部での心理臨床や研究活動を通じて多角的な知見をお持ちの先生です。ご講演を通して、フロアの皆様も交え、不登校の今日的問題について理解を深める時間にできればと思います。午後の部では、客員准教授の村井雅美先生、本研究科臨床心理学講座の野口寿一准教授、当センター教員の畑中准教授と松下が講師を務め、分科会形式にて事例研究を行います。この分科会には、全国から多くのご参加を頂き、各現場や地域で苦慮されている難しい問題について秘密厳守にて大切に検討しており、毎年好評を博しております。今年度も多くの方々にご参加を頂き、現代の心理社会的問題の理解と対応の器づくりを共に進めていけるよう願っています。

秋には、イギリス精神分析協会の精神分析家・訓練分析家のカナン・ナバラトナ先生を外国人客員教授として招聘し、心理臨床家だけでなく広く一般の方々も対象とした公開講座を開講します。ナバラトナ先生は、多様な文化的背景をもつ人々の心理臨床や教育研究に長年携わっておられ、エスニシティや文化性にまつわる新たな視点を頂けることをとても楽しみにしております。貴重な機会ですので皆様も是非ご参加ください。

教育実践コラボレーション・センターから

国内外の多様な取り組みについて

臨床心理学講座　准教授
西 見奈子

教育実践コラボレーション・センターは「子どもの生命性と有能性を育てる教育・研究推進事業」を推進すべく、さまざまな活動に取り組んでいます。そこでは、国内外問わず、さまざまな方をお招きして講演や研修会をおこなってきました。例えば、昨年度の「知的コラボの会」では、藤間公太先生にコーディネートしていただき、カーディフ大学のシン・イー・チャン先生をお招きしてご講演をおこないました。また、広瀬悠三先生のコーディネートの元、京田辺シュタイナー学校の若林伸吉先生にもご講演いただいております。

また、私自身が関わったものとしてルーヴェン大学の名誉教授であるルディ・ベルモート先生をお招きして「無心の対話（四）」という国際シンポジウムを11月2日（木）京都大学楽友会館にておこないました。このイベントについて少し詳しくご報告させていただきます。

このイベントは久しぶりの対面開催であり、さらに平日の午前中という日程でしたが、全国から60名以上の、会場の人数制限を超える事前申込みがありました。それはやはり無心というテーマへの関心の高さを表していたように思います。無心は馴染みのある言葉ですが、教育との関連ではあまり繋がりを感じられないものかもしれません。今回、開かれた国際シンポジウムでは、無心という心の状態がいかに私たちの思考や閃きに関わっているかということが議論されました。例えば、学習というのは段階的に進んでいくかのように考えられていますが、突然、スパークしてそれまでの学習成果が一気に花開いていくことも認められています。そこにどのように無心という心の状態が関わっているのか、こうした面白い議論が展開しました。このシンポジウムの成果については近く書籍『精神分析と無: ビオンと禅の交差（仮）』（金剛出版）として発売される予定ですので、関心のある方はご一読ください。

当センターではこうした魅力的なイベントをたくさんおこなっています。詳細については、当センターのウェブページをぜひご覧ください。

グローバル教育展開オフィスから

研究科における教育研究の国際化の拡充に向けて

グローバル教育展開オフィス長
南部 広孝

グローバル教育展開オフィスでは、昨年8月の張潔麗助教の着任に続き、今年3月にはパクジュナ講師が着任され、組織体制の充実が進みました。

オフィスでは2023年度、大学院学生の国際学会での発表や論文投稿に対する支援、グローバル教育科目の提供などを実施しました。コロナ禍での海外渡航制限が緩和されたこともあり、これまでよりも多くの学生がオフィスの支援を受けて国際学会で発表したり、海外でインターンシップ、フィールドワークを実施したりしました。それに加え、学術交流協定に基づき学生も参加して行われている国際交流活動などにも支援を行いました。

2024年1月31日には高山敬太・前オフィス長を講師として、海外に向けた研究発信を考えている学生を対象に特別講座「国際学術出版（英語）を本気で考えているあなたへ」をオンラインにて開催しました。大学院学生、研究者、大学教員などあわせて80名近くの参加があり、高山先生から国際学会誌に投稿するための方法論及び意義に関する刺激的な内容をお話しいただいた後、活発な質疑応答が行われました。ご講演の内容はオフィスのウェブサイト（https://global.educ.kyoto-u.ac.jp/）で公開していますので、ご関心のある方はぜひご覧ください。

また、論文の書き方や研究の進め方に関する国内外の図書を選んで取り揃えるとともに、大学院学生への支援の一環として学生から希望を募って外国図書（電子書籍を含む。）を購入して、図書室の蔵書に加えました。これらの図書が学生の学修と研究の進展に資することを期待しています。

本オフィスは、教育学研究科また教育学部の中の「国際化」にも目を向けながら、今年度もひき続き多様な事業や支援を推進してまいります。あわせて、ウェブサイトの充実も含め、活動の成果を積極的に発信していくことに取り組んでいきます。今後とも変わらぬご支援とご協力を賜りますようお願い申し上げます。

GEO
京都大学大学院教育学研究科
グローバル教育展開オフィス
Global Education Office

事務室から

3年越しに

教務掛員
小林 紗菜

先日、ふらっとソウルを散歩しているとなぜか懐かしく感じる場所にたどり着きました。私はコロナ禍に少しだけソウルにいたのですが、住所を調べてみると、以前自己隔離をした宿所の近くだったのです。

今となっては考えられないですが、当時は出入国時にPCR検査の陰性証明書が必要であったり、入国後14日間は常にアプリで監視されながら自己隔離が必要であったりと手続きが大変だったことを思い出しました。経費を抑えるために隔離施設や食料の手配をすべて自分で行い、なんとか14日間耐え抜きました。インドアの私でも外に出られないのがしんどくて、隔離終了までに保健所でPCR検査を受けないといけなかったのですが、行先が保健所でも外出できることが本当に嬉しかったのを覚えています。

写真は先日撮影したもので、保健所へ向かう途中の道です。3年越しにまったく同じ場所にたどり着いたことに縁を感じました。

私自身、すっかりコロナ前の生活に戻っていたので忘れつつありましたが、当たり前のことを当たり前にできることに感謝して日々生活していきたいと改めて感じさせられました。

第5回　ドルトムント工科大学教育・心理学部 ―京都大学大学院教育学研究科・教育学部 研究ワークショップ

教育・人間科学講座　准教授
広瀬 悠三

2024年3月25～26日の2日間、ドイツ・ドルトムント工科大学との第5回研究ワークショップが、本学時計台記念館の会議室にて30名ほどの参加者の下に開催されました。両大学は2016年に部局間の研究交流協定を結んで以来、活発に交流してきましたが、コロナ禍で2年間の交流の中断を余儀なくされました（2020~2022年）。新たな研究交流をスタートすべく、世界的な戦争や地球環境問題といった切実な問題に対峙して教育・人間形成を考えたいとの思いから、前回（第4回研究ワークショップ@ドルトムント工科大学、2023年3月）と今回は「世界市民的教育」をテーマとして研究交流を行いました。

本ワークショップでの発表は、ドイツ教育人間学の鍵概念である身体のミメーシスという体験を伴う旅の世界市民的経験についての考察や、広島の被爆者の証言を元に絵を描くことで培われる世界市民性に関する伝記的研究、また異種（例えば動物）との関係から世界市民を吟味する考察などでした。歴史人類学を踏まえた教育人間学や、質的な伝記的研究、また地球環境に配慮する考察など、ドイツ特有の教育哲学・人間形成論の視点からの世界市民的教育についての議論は、刺激に満ちており、普遍的価値の重視やグローバル人材の育成など、ステレオタイプの世界市民的教育を、新たな世界へと解き放つという意味で、まさに世界市民的でした。

今回のワークショップでは、本研究科の大学院生6名が司会・モデレーターを務め、ドルトムント工科大学の研究者8名（教員6名・院生2名：教育哲学、教育人間学、家族社会学等の研究者）がそれぞれ発表を行い、その後小グループに分かれて議論し、さらに全体で質疑応答と議論をすることで考察を深めました。とくに小グループでまずは議論することで、内容理解のみならず相互理解や交流も深まり、全体で議論や質疑応答が非常に活発に行われ、休憩時間や昼休憩、また初日夜には懇親会にて、さらに交流を深めることができました。ご参加・ご支援に心から感謝申し上げます。

Presentation by Uhlendorff

小グループ議論風景

若手研究者出版助成事業

教育学研究科では、京都大学人と社会の未来研究院若手出版助成を受け、優秀な若手研究者による博士論文の出版助成事業を行っております。本制度を利用して昨年度は5件採択されましたので、ご紹介します。

「モダンガール」の歴史社会学　国際都市上海の女性誌『玲瓏』を中心に

【晃洋書房】

呉 桐　京都大学大学院教育学研究科博士後期課程修了（2023.3）／中国人民大学外国語学部　講師

近代では、ヒト・モノ・情報の越境が活発化し、女らしさのあり方はトランスナショナルな文脈ぬきには語れません。それを象徴的に表しているのは、グローバルな共時的現象として注目を集めているモダンガール現象です。

本書は、「モダンガール」という女性表象を半植民地主義の視点から捉え直し、戦前上海におけるトランスナショナルな女らしさの構築メカニズムを探究するものです。「上海モダン」の震源地で誕生した女性誌『玲瓏』を検討することで、当時メインストリームだった母性主義イデオロギー自体の混成的性格と、多層的な勢力間の相互牽制の可能性について考察しました。本書が、ジェンダー観の形成をめぐる多国間交渉を歴史的に考える一助になれば幸いです。

≪中学生日記≫のメディア史　自主性を演じるドラマ

【創元社】

王 令薇　京都大学大学院教育学研究科博士後期課程修了（2023.3）／江戸川大学　メディアコミュニケーション学部　助教

本書は、NHK名古屋放送局が制作・放送したドキュメントドラマ≪中学生日記≫（1972年～ 2012年）に着目し、思春期を迎えた中学生たちが自分自身の「日常」を演じるという独特な設定を可能にし、さらに40年間にもわたっての長期的な企画にした、この型破りなドラマの全体像を解明するメディア史です。この番組は「日常中学校等で行っている普通のこと」をどのように描き出し、時代とともにストーリーがどのように変化してきたのか、どのように多くの視聴者の興味を喚起することができたのか、出演者に対していかなる教育効果を発揮しようとしたのかについて分析しています。本書がテレビ研究者・教育メディア研究者にとってはもちろんのこと、日本の中学校教育の変容に関心を持つ方にとっても少しでも参考になれば幸いです。

「私と汝」の教育人間学　―西田哲学への往還―

【京都大学学術出版会】

髙谷 掌子　京都大学大学院教育学研究科博士後期課程修了（2022.3）／石川県西田幾多郎記念哲学館 研究員

京都大学教育学部の学風に、西田幾多郎を始めとする哲学の京都学派からの影響が見出せることは、学部創立70周年記念イベントでも話題になりました。本書は、そのような系譜を指摘する思想史研究をもとに、戦前の西田哲学と戦後の教育人間学の間に対話を仮構していく思想研究です。

キーワードとなるのは「自覚」です。西田は自覚を疑いえない事実としましたが、同僚の田邊元や弟子の木村素衛、その弟子の森昭にとっては、自覚は求めることによって初めて見出され、生成するものでした。自覚、すなわち自ら覚ることを伝えるために、「私と汝」の間で交わされうる応答に焦点を当てます。

中国高等職業教育の展開　―その制度的・教育的・文化的要因から―

【東信堂】

張 潔麗　京都大学大学院教育学研究科博士後期課程修了（2023.3）／京都大学教育学研究科グローバル教育展開オフィス・助教

近年、高等教育段階の人材育成が注目され、実践されるようになった一方で、その課題も挙げられます。例えば、特定の職業に就くための人材を育成する高等職業教育及びそれを提供する機関をめぐって、制度設計を行う政府側、実務を担うと期待される機関及び企業側、教育を受ける学生と保護者側の間には、異なる思惑と力関係、そしてこれらに起因するズレが存在していると考えられるでしょう。

本書は、こうした多様な主体がそれぞれ考えを持っているなかで、高等職業教育はどのように展開され、受容されているかという問いのもと、統一と多様が共存している中国の状況を、制度的・教育的・文化的の側面に分けて検討しています。本書は、高等職業教育諸側面の関係者、そしてその拡大に伴う高等教育システム全体の変容に関心を持つ読者に参考になれば幸いです。

近現代中国と読書の政治　読書規範の論争史

【東京大学出版会】

比護 遥　京都大学大学院教育学研究科博士後期課程修了（2023.3）／日本学術振興会特別研究員PD

人々は読書という行為にいかなる期待を込め、そしてその期待はいかなる社会的背景で形作られたのか。書物破壊の鮮烈な象徴作用ゆえに、焚書が強権政治の非人道性の表出として、そしてその対極にある読書がそれへの精神的抵抗として位置付けられることは少なくない。しかし、このような「本を読む彼ら」と「本を読む我々」を対置する「焚書の政治」の枠組みに対して、本書で提起する「読書の政治」の枠組みでは、「政治」を読書行為に内在するミクロなせめぎ合いとして捉える。1930年代と1980年代を中心とする20世紀の中国における「あるべき読書」の論争を歴史的に分析する本書は、過去からつながる現在の中国を理解するとともに、これからの読書を考えるものである。

諸記録

教員寄贈図書　2023（令和5）年度

寄贈者氏名	寄贈図書名	出版社	出版年
奥村 好美	Educational evaluation and improvement in Japan : linking lesson study, curriculum management and school evaluation	Springer	2023
楠見 孝	より良い思考の技法：クリティカル・シンキングへの招待	放送大学教育振興会	2023
齋藤 直子	自己啓発のひみつ (スペクテイター = Spectator ; vol. 51)	幻冬舎	2023
佐藤 卓己	内閣情報部情報宣伝研究資料 第4巻, 第5巻	柏書房	1994
佐藤 卓己	『外国の新聞と雑誌』に見る海外論調 第16巻-23巻, 第25巻-第30巻	柏書房	2000-2001
佐野 真由子	近世 (つなぐ世界史 ; 2)	清水書院	2023
佐野 真由子	万博学 = Expo-logy 第2号	思文閣出版	2023
田中 智子	海軍飛行予科練習生 佐野元 空は星の満艦飾なり	地域資源を掘り起こす会	2023
南部 広孝	リーディングス比較する比較教育学	東信堂	2023
西岡 加名恵	高等学校「探究的な学習」の評価：ポートフォリオ、検討会、ルーブリックの活用	学事出版	2023
西岡 加名恵	「『生きる』教育」：自己肯定感を育み, 自分と相手を大切にする方法を学ぶ	日本標準	2022
西岡 加名恵	心を育てる国語科教育：スモールステップで育てる「ことばの力」	日本標準	2023

受入期間：2023/4/1 ～ 2024/3/31　寄贈者氏名順（敬称略）
教育学研究科・教育学部図書室にいただいた寄贈者の著作・分担執筆・翻訳・監修・監訳のみ掲載です。
今後とも蔵書充実のためにご寄贈くださいますようよろしくお願いいたします。

主な出来事（2023.11.1~2024.3.31）

2023年11月2日（木）

教育実践コラボレーション・センター E.FORUM
「無心の対話（四）」
講師：松木 邦裕名誉教授、西平 直名誉教授、Rudi Vermote（KU Leuven）
京都大学楽友会館

11月3日（金・祝）

教育実践コラボレーション・センター E.FORUM
連続研究会「『生きる』教育」（第5回）「『安心・安全』の学校づくり」
講　師：大阪市立南市岡小学校 木村 幹彦校長
　　大阪市立田島中学校 田中 梓養護教諭
オンライン

教育学研究科附属臨床教育実践研究センター主催　公開講座
「手で夢見ることートラウマ治療において、箱庭療法はどのように作用するのかー」
Alexander Esterhuyzen（Progression Psychology Practice）

11月6日（月）
教育実践コラボレーション・センター E.FORUM
「『企業内研修を見つめ直す』―カリキュラム研究の視点から見る 企業内研修の設計思想」
講師：西岡 加名恵教授、石井 英真准教授
オンライン

11月10日（金）
高大連携事業：滋賀県立膳所高等学校
高校生向け特別授業「図書館の歴史と多様性」
福井 佑介准教授
京都大学総合研究2号館

11月22日（水）
広島県・広島県教育委員会後援による公開講演
京都大学講演会 京大の知 in 広島「ネガティブ・リテラシーのすすめ ーあいまい情報のメディア学」
佐藤 卓己教授
ANAクラウンプラザホテル広島

12月4日（月）
高大連携事業：山形県立米沢興譲館高等学校
「関西キャリア研修」
梅村 高太郎准教授
京都大学教育学部本館

12月21日（木）
自主講座「認識台湾 Renshi Taiwan」
『返校』上映会＆アフタートーク
駒込 武教授
京都大学吉田南キャンパス

12月23日（土）
高大連携事業
「高大連携フォーラムin京都大学」
西岡 加名恵教授
京都大学人間・環境学研究科棟

2024年1月31日（水）
グローバル教育展開オフィス
特別講座　「国際学術出版（英語）を本気で考えているあなたへ」
登壇者：高山 敬太教授
オンライン

2月3日（土）配信開始
教育実践コラボレーション・センター E.FORUM
オンデマンド講義「今、求められる学習評価の考え方と進め方」（全4回）
講師：西岡 加名恵教授、石井 英真准教授、奥村 好美准教授
京都大学教育学部本館第一会議室

3月20日（水・祝）
「記憶2」上映会・映画「記憶2」と自立準備ホームをめぐるトークセッション
岡邊 健教授
キャンパスプラザ京都

3月23日（土）
教育実践コラボレーション・センター E.FORUM
2023年度E.FORUM全国スクールリーダー育成研修「第19回実践交流会」
公開シンポジウム「深まりのある探究へと生徒をどう導くか」
松下 佳代教授、石井 英真准教授
京都大学総合研究3号館

3月25日（月）～3月26日（火）
グローバル教育展開オフィス
第5回 ドルトムント工科大学教育・心理学部
―京都大学大学院教育学研究科・教育学部・研究ワークショップ
Cosmopolitan and Global Citizenship Education in Times of Crisis
百周年時計台記念館

入試結果　2024（令和6）年度

教育学部

日程等		募集人員	志願者数	受験者数	合格者数	入学者数
一般選抜入試 前期日程	文系	48	162	154	48	57
	理系	10	32	32	10	
特色入試		6	23	23	2	2
学士入学（第3年次編入学）		10	30	30	9	8

※前期日程の募集人員は、特色入試において最終的な入学手続者数が募集人員に満たない場合には、残余の募集人員を加えます。

教育学研究科

課程等			募集人員	志願者数	受験者数	合格者数	入学者数
教育学環専攻	修士課程	研究者養成プログラム	37	70（14）	70（14）	37（6）	37（6）
		アカデミック・リカレント教育プログラム	5	6	6	3	3
	博士後期課程	研究者養成プログラム	若干名	14（2）	14（2）	2（0）	2（0）
		臨床実践指導者養成プログラム	4	6	6	3	3

※博士後期課程（研究者養成プログラム）は内部進学者を除いた数。　（　）内の数は外国人留学生で内数

学位授与件数　2023（令和5）年度

学位名等		授与者数
学士	教育科学科	68
修士	教育学環専攻	34
博士	課程博士	11
	論文博士	0

教育職員免許状取得状況　2023（令和5）年度

中学校教諭専修免許状	0
中学校教諭1種免許状	3
高等学校教諭専修免許状	0
高等学校教諭1種免許状	4
特別支援学校教諭1種免許状	0

外部資金受入れ（2023.10.1～2024.3.31）

寄附金

研究題目	寄附者	研究担当者
乳幼児期の食習慣と腸内細菌叢に関する発達研究のため	社会福祉法人長陽会　理事長	明和 政子
Warwick大学教員とのメンタルヘルス教育に関わる共同研究	Dr Emma Williams, Education Studies, UNIVERSITY of Warwick	齋藤 直子
こども期の食習慣と腸内細菌叢に関する発達研究のため	松栄興産株式会社	明和 政子
E.FORUMに関する活動のため	TOPPANホールディングス 株式会社	西岡 加名恵
２０２４年度研究調査助成 「教育産業における情報通信技術の導入に関するメディア史的研究」	公益財団法人電気通信普及財団	藤村 達也

受託研究

研究題目	委託者	研究担当者
音楽養育環境による乳幼児の内受容感覚発達のメカニズム解明	国立研究開発法人 科学技術振興機構	明和 政子
児童／生徒および教師を対象とした生理・心理機能 および食生活習慣との関連性の検証	国立研究開発法人 科学技術振興機構	明和 政子
教育コンテンツ・評価手法と探求指導力育成研修の開発	国立研究開発法人 科学技術振興機構	松下 佳代

科学研究費補助金　2024（令和6）年度

事業名	研究課題名	氏名
基盤研究（S）	個別的育児支援手法の創出を導く養育者―乳児の動態とその多様性創発原理の解明	明和 政子
基盤研究（B）	若年者の犯罪・非行からの離脱プロセス：デジスタンスを促す／妨げる社会的要因の探求	岡邊 健
基盤研究（B）	日本植民地統治下台湾における教育の「植民地性」再考―共時的・通時的比較分析	駒込 武
基盤研究（B）	大学教授職の役割分化の実態と論点の整理：日豪の教育担当教員を事例に	佐藤 万知
基盤研究（B）	領域横断的な万国博覧会史研究を通じた新しい戦後史叙述の可能性	佐野 真由子
基盤研究（B）	コンピテンシーの形成・評価の検討―統合性・分野固有性・エージェンシーに着目して―	松下 佳代
基盤研究（B）	子どもの多様なニーズに対応するパフォーマンス評価を活かしたカリキュラム改善	西岡 加名恵
基盤研究（B）	共感覚比喩と共感覚現象に共通する認知メカニズム：大規模web実験による検討	楠見 孝
基盤研究（B）	SNSカウンセリング相談員養成プログラムの開発	畑中 千紘
基盤研究（B）	自己超越的感情の生起メカニズムに関する心理・生物・情報学的研究	野村 理朗
基盤研究（B）	実行機能を「実行」する知識の獲得過程と運用機構の解明	齊藤 智
基盤研究（C）	近世医療情報の教育メディア史―「不安」に挑む「施印」	VAN STEENPAAL,Niels
基盤研究（C）	ＳＴＥＡＭ教育を軸としたカリキュラム・マネジメントの推進にむけた教員の力量開発	開沼 太郎
基盤研究（C）	教育的関係における信頼の理論と実践に関する研究	広瀬 悠三
基盤研究（C）	社会情動的コンピテンシーの測定と涵養：特性とスキルの弁別のための教育心理学的研究	高橋 雄介
基盤研究（C）	人間本性と理性の陶冶についての教育哲学研究：実践知の特性の究明と涵養に向けて	三澤 紘一郎
基盤研究（C）	本邦におけるスーパーヴィジョンの成り立ち―精神分析史からのアプローチ―	西 見奈子
基盤研究（C）	日本型学校教育の構造変容に対応する資質・能力ベースのカリキュラムと授業の再構築	石井 英真
基盤研究（C）	公立図書館集会室の理念と現実の確執に関する歴史と現状の分析	川崎 良孝
基盤研究（C）	都市新中間層家庭の人間形成と教育戦略：大正・昭和初期の児童文学の分析を中心に	竹内 里欧
基盤研究（C）	通学制大学と通信制大学の比較を通した高等教育の役割とその教育手段の明確化	田口 真奈
基盤研究（C）	コンセプトマップによる学習成果可視化のための評価指標の開発とウエブシステムの構築	田口 真奈
基盤研究（C）	明治期中学校形成史の再検討―「辺境」の視点・鳥瞰的視角から―	田中 智子
基盤研究（C）	明治期におけるカナダ・メソジスト教会の教育事業－公教育と学校制度の展開への対応―	田中 智子
基盤研究（C）	教員の思考様式等を考慮した教育政策の立案・実施に関する研究	服部 憲児
基盤研究（C）	自閉スペクトラム特性の強みを探る	明地 洋典
基盤研究（C）	人を全体的にとらえるとは：アメリカ哲学の文脈的全体性をめぐる国際的教育研究	齋藤 直子
挑戦的研究（開拓）	カリキュラム空間：生徒の自己調整思考能力を高める革新的なカリキュラム編成	Manalo Emmanuel
挑戦的研究（萌芽）	「いき」の認知科学	野村 理朗
国際共同研究強化（B）	いかにして国際社会で使える英語を身につけるか：スピーキング力と意欲の向上を端緒に	Manalo Emmanuel
国際共同研究強化（B）	認知リソース概念の誤謬に挑む国際共同研究	齊藤 智
国際共同研究強化（海外）	心の働きを制御する心の働きを探る国際共同研究：社会構成主義的心理科学アプローチ	齊藤 智
若手研究	学士課程段階の高等職業教育の社会的受容状況に関する実証的研究－中国を事例にして―	張 潔麗
若手研究	オランダのオルタナティブスクールにおける教師の指導性	奥村 好美
若手研究	里親支援についての日伊比較研究：＜脱施設化＞の社会的背景の解明に向けて	藤間 公太
若手研究	童話『ピノキオ』をめぐる差別図書問題と図書館の対応に関する総合的研究	福井 佑介
若手研究	知識人と労働者による教育空間の形成と展開―京都労働学校の戦後史―	奥村 旅人

人事異動（2023.11.1～2024.4.30）

【2023（令和５）年12月1日】

	派遣職員（教職教務掛）	採用

【2023（令和５）年12月19日】

	派遣職員（地域連携教育研究推進ユニット）	採用

【2024（令和６）年1月1日】

松永 倫子	研究員（教育・人間科学）	採用

【2024（令和６）年1月9日】

	派遣職員（教育・人間科学）	採用

【2024（令和６）年1月21日】

	事務補佐員（高等教育学）	任期満了

【2024（令和６）年2月29日】

	派遣職員（教職教務掛）	任期満了

【2024（令和６）年3月1日】

PARK Joonha	講師（グローバル教育展開オフィス）	採用
	事務補佐員（グローバル教育展開オフィス）	採用

【2024（令和６）年3月31日】

佐藤 卓己	教授（教育社会学）	退職
石黒 翔	助教（教育認知心理学）	任期満了
長谷 雄太	特定助教（臨床心理学）	任期満了
西山 慧	研究員（教育認知心理学）	任期満了
西口 美穂	研究員（教育認知心理学）	任期満了
勝間 理沙	研究員（高等教育学）	任期満了
GOTZ,Patrik	研究員（教育認知心理学）	任期満了
	事務補佐員（教職教務掛）	任期満了
	事務補佐員（人間・教育科学、教育認知心理学）	任期満了
	事務補佐員（人間・教育科学）	任期満了
	事務補佐員（教育社会学）	任期満了
	事務補佐員（グローバル教育展開オフィス）	任期満了
	事務補佐員（教育研究関連）	任期満了
	教務補佐員（高等教育学）	任期満了
	技術補佐員（教育・人間科学）	任期満了
	派遣職員（教育・人間科学）	任期満了

【2024（令和６）年4月1日】

奥村 旅人	講師（教育社会学）	採用
西山 慧	助教（教育認知心理学）	採用
清重 英矩	特定助教（臨床心理学）	採用
黒田真由美	特定助教（SIP）	採用
奥村 悠人	掛員（教務掛）教育推進・学生支援部入試企画課主任（入試第一掛）へ昇任・配置換	
小林 紗菜	掛員（教務掛）施設部施設企画課（施設予算掛）より配置換	
石黒 翔	研究員（教育認知心理学）	採用
澤田 和輝	研究員（教育認知心理学）	採用
栗村亜寿香	研究員（教育社会学）	採用
袁 通衢	研究員（高等教育学）	採用
	派遣職員（教職教務掛）	採用
	技術補佐員（教育・人間科学）	採用
	技術補佐員（教育・人間科学）	採用
	事務補佐員（教育認知心理学）	採用

【2024（令和６）年4月3日】

菊池由葵子	研究員（教育・人間科学）	採用

新任教員・事務職員紹介

PARK Joonha　講師
所属：グローバル教育展開オフィス
専門：社会文化心理学

私は社会文化心理学が専門で、主にアジア社会の様々な現象(多文化化、不幸感など)について研究しています。これからどうぞよろしくお願いします。

奥村 旅人　講師
所属：生涯教育学講座
専門：生涯教育学

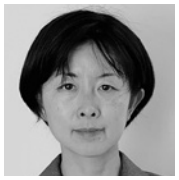
学校教育システムの“外側”で生じる、人間の自己形成について研究しています。どうぞよろしくお願いいたします。

西山 慧　助教
所属：教育認知心理学講座
専門：認知心理学

心理学的な観点から思い出す・忘れることのメカニズムを研究しています。お世話になってきた本研究科に貢献できるよう邁進します。よろしくお願いいたします。

清重 英矩　特定助教
所属：臨床心理学講座
専門：臨床心理学

心理臨床におけるイメージと関係、色彩に関心を持って研究を行っています。研究科に貢献できるよう尽力いたします。どうぞよろしくお願いいたします。



黒田 真由美　特定助教
所属：教育・人間科学講座
専門：教育心理学

学校の事後検討会にROUND STUDYを導入する効果について研究しています。
どうぞよろしくお願いいたします。

小林 紗菜　教務掛員

４月から教務掛でお世話になっております。教務系の業務は本学では初めてで、ご迷惑をおかけするかもしれませんがどうぞよろしくお願いいたします。

教育学研究科・教育学部基金

ご寄附いただきました方々への感謝の意を込め、ここにご芳名を掲載させていただきます。
（公開をご希望されない方については、掲載しておりません。）

大倉 寿之　　中村 文彦

※50音順　※2024年4月末現在

ー現場に活かせる「理論と実践の往還型の教育・研究」を推進し、未来の教育の創造と、それを担う人材を育成します。ー

教育学研究科・教育学部は、1949（昭和24）年の創設以来、教育学研究の推進と研究者の養成に加え、全学の教職教育を担いながら、数多くの卓越した人材の輩出と、研究成果の現場への還元によって社会の要請に応えてきました。

学校はもとより、地域、家庭、職場などあらゆる場面が「人間形成」の場であり、探究の対象です。本研究科・学部では、不登校・学習意欲不振生徒のための学校改善、過疎地域への地域振興提言などを行うほか、全国の教育現場の第一線で働く人々に研修の機会を提供してきました。こうした社会と連携した教育研究活動は、学生にとって、現場のリアルな問題に触れて自らの関心を見つけ、課題解決への手法を考察する実践の場ともなっています。今後も社会と連携した実践教育を行うため、安定した財政基盤として設立したのが教育学研究科・教育学部基金です。

2021（令和3）年度には、教育学研究科・教育学部基金のご支援によって、ホームページを大幅に刷新させていただきました。このリニューアルは、教育学環専攻1専攻への改組とその意図を明確に反映し、「理論と実践の往還型」の教育・研究をより一層力強く推進するため、研究科・学部の活動の発信媒体としてのホームページの再構築を目的として行われました。2022（令和４）年度には、基金からの支出は行わない方法でコンテンツを充実させ、ホームページを洗練してまいりました。今後、引き続き、研究支援と教育支援を充実させるため、本基金を発展的に活用させていただきます。ご支援賜りますようお願い申し上げます。

基金の使途：

項　目	具体例
(1) 教育支援	・学生のための図書・教材等の購入 ・学生関係居室の整備・維持管理 ・障害学生等のための学習補助者の雇用 ・学生・院生の海外派遣　など
(2) 研究支援	・研究活動基盤整備の支援 ・研究・学術資料の整備 ・公開講座・講演会等の開催　など
(3) その他事業支援	・京都大学教育学研究科シリーズ本の出版補助 ・修了生・卒業生との連携活動　など

詳細については以下をご覧ください。
http://www.kikin.kyoto-u.ac.jp/contribution/education/index.html

編集後記

新型コロナウイルスが感染症法上の5類に移行されてから、1年が経過しました。新しい生活様式での大学生活に順応してきた学生さんたちですが、今では対面での授業や研究活動、課外活動を新鮮な気持ちで楽しんでくれているように感じます。長く気がかりであったパンデミックの年に入学した学部生も、その多くが昨年度卒業されました。それぞれの新天地で、本物と出会い、触れ、感動する経験を得ながら、さらなる飛躍を遂げてくださっていると信じています。　（明和 政子）

表紙によせて

コロナ禍以降はじめて、この3月に京大にて、ドイツ・ドルトムント工科大学との研究ワークショップが開催されました。学会大会と通常のゼミの間に位置づけられる本ワークショップは、参加者にとって他者の声に耳を傾けながら自ら悩み考えつつ発言することで、新たな理解や視点が得られる、形成的な貴重な場になったように思います。3月末とは思えない寒い日での開催でしたが、その分活発な議論で、空間をあたためることができました。　（広瀬 悠三）

京都大学教育学研究科・教育学部広報委員会

委員長　明和 政子　教授（人間・教育科学講座）
委員　畑中 千紘　准教授（臨床心理学講座）
委員　開沼 太郎　准教授（教育社会学講座）

事務担当
教育学研究科・教育学部総務掛　ホームページ　http://www.educ.kyoto-u.ac.jp

ガイドドッグペーパー
当印刷物の用紙費用の一部は
関西盲導犬協会に寄付されています